

現地通信

このところ(1983年10月中旬), バンコクの新聞の第1面は連日、洪水のニュースで埋まっている。2, 3の地元紙には、わがスポーツ紙ばりの、赤太字の、ヒステリックな見出しが躍っている。無理もない。バンコク東部の下町から郊外の新興住宅地は、もう2カ月近くも水漬かりなのである。一雨降るたびに、道路もソイ(小路, 横丁)も市場も住宅地も湛水し、排水運河に溢れた水をチャオプラヤー河に揚水排除するまで、その滞水は続く。道路ぞいの商店では、おののお店先に土囊(どこの)を積んだり、コンクリート・ブロックの防壁を築いたりして、道路からの溢水を防ぐのに大わらわである。

世界に冠たるバンコクの交通渋滞は、そのたびにますます収拾のつかぬことになり、しばしばその蝸牛の歩みも完全に止まってしまうことになる。スクムウィット通りをずっと東に下ったプラカノン・サムロン地区では、ソイの交通はボートに頼るほかはない。ウソのようなことが、この大都市で2カ月近くも続いているのである。

雨季に入る直前に、「今年の洪水対策は万全である」と豪語した都知事ティアム氏は、いま、非難の矢面に立たされている。そういえば、6, 7月ごろの暑い最中、囚人をも含めた労務者たちが真っ黒になって街じゅうの下水を掃除している光景をよくみかけたものである。いま、懸命に応急処置を施すのであるが、一雨あれば元のモクアミになってしまう。

* Yoshihiro Kaida, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

バンコクの洪水

海田 能 宏*

ついにお見兼ねになったのか、国王おん自らヘリコプターで浸水地域をご視察になり、極めて具体的な排水プランをご提示なさった。これによってはじめて、都庁下水道局、政府灌漑局、陸軍近衛工兵隊の共同作業が可能になり、いま、新排水路の掘削、市中を流れる主な運河の堤防嵩上げ、揚水機の増設などによって、洪水の分散と排除がようやくにできそうになってきた。だが、これとても急場しのぎにすぎない。

私のみるところ、タイの新聞は政治的論調に傾きがちで、今回の洪水災害にしても、正確な報道や長期的対策の展望を抜きにして、人災論を展開しては当局の責任問題追及に急である。それに野党が乗ったかたちで、紙面から判断するかぎり、哀れなティアム氏らはいまにも罷免されかねないほどの窮地に落ちているように見える。ただし、私がつき合う範囲の庶民からは、そんな厳しい批判の声を聞いたことがない。うちの運転手君はトンブリから、お手伝いさんはプラカノンから通勤してくるが、それぞれ日によってヒザ下から太ももまでの深さの、澱んだ黒い水の中を歩いてバス通りに出、7時にはちゃんと出勤してくる。「ひどいもんですよ」と笑っているのみである。みんなあきらめているのだ。

バンコクの洪水の原因は次の五つである。

- (i) チャオプラヤー河上流からの洪水の溢水、
- (ii) バンコク北部および東部の田園地帯からの押水、
- (iii) チャオプラヤー河の高潮位による溢水と排水妨害、

(Ⅳ)地盤沈下、それにももちろん、

(Ⅴ)熱帯性低気圧による降雨の滞水、である。

バンコク建都以来の大洪水は8回を数えるが、それらはことごとく原因(i)を主とし、それに(ii)と(iii)が加わったものであった。ところが、近年の洪水は(Ⅵ), (Ⅳ), (iii)が主因である。これは、上流の大ダム建設とデルタ灌漑網の整備によって、大洪水がチャオプラヤー本流に放出されることはなくなっているのであるが、内水がはけなくなってしまったことを意味する。

かつては、「東洋のベニス」といわれたほどの見事な運河網によって、内水の滞留に対応することができた。現在の大通りや小路の多くはかつては運河であり、道路はそのワキにくっついていたにすぎない。それらは次々に埋め立てられて、立派な大通りになっていった。バンコク湾に出入りする船の航行を安全にするために、河口砂洲の大規模な浚渫が続けられている。これが洪水疎通をよくする一方で、海水遡上をも容易にし、大潮（おおしお）時にはチャオプラヤー河の潮位がとんでもない高さになる原因となっている。

上・工水道の不備から、工場やホテル、そのほかの大きな事業所は井戸水に頼らざるを得ない。現在、150 m 前後から深いもので300 m 弱の打込み深井戸 12,000本から汲み上げる水量は日々莫大なもので、これが地盤沈下の最大の原因と考えられている。大工場が集中するプラカノンからサムットプラカンに至る地域の地盤沈下は、年間 10 cm という恐ろしい速度である。ほんの数十センチメートルの起伏が土地利用をも規制してしまう低平デルタの最下流部であって、この激しい地盤沈下はいかなる洪水対策をも無に帰さしめるものである。

バンコクの中産階級が住む、東郊の新興住宅団地は、ついこの間まで水田であった。もともと長期間水が滞留することを条件とする

デルタの水田適地に、道路をつけ、ちょっと土盛りして住宅地にしたところで、年中乾いた快適な環境を期待するのが、どだい無理なはなしである。

あれやこれや、要するにバンコクという巨大都市は洪水・浸水に耐え得る体質を喪失しつつある。水文環境的にアンフィビアスなモンスーン地帯の大デルタ下流部であって、アンフィビアスリーに居住するという適応を忘れてしまったともいえる。これで、もし上流からの洪水を回避する遠い地方の諸施設が整備されていなかったとしたら、今年は10月下旬にはバンコクは文字通り沈没していることになったろう。

いま急に都知事氏が張り切ったところで、バンコクの洪水を今日、明日に止めることができるわけではない。上に挙げた（ほかにもあるかもしれない）原因を一つ一つ取り除いてゆく息の永い対策が必要になる。例えば、地盤沈下を沈静化するために上・工水道の拡大整備を実行し、かつての運河網を復活させるか、それが無理ならば、匹敵する暗渠の排水路網を建設し（一部工事中と聞く）、淀川下流域にあるような大排水機場をいくつか設け、そして港湾施設を東海岸のチョンブリあたりに移すこと（これも計画中である）などである。それにも増して必要なのは、バンコクの用途地域のゾーニングを実行することであろう。最後の項目を除いては、その気になれば10年か20年でできることのように思える。上のすべてに着手することができないようであれば、バンコクはどこかへ遷都するほかはなかりう。

今日は10月18日、熱帯性低気圧ハーバート嬢に踵を接して、キム嬢もカンボジアからデルタ地帯へ入ってきた。涼しいのはありがたいが、朝から断続的に激しい雨が降り続けている。今日、明日は、逼塞しているにかぎる。あの渋滞地獄にまきこまれないように。
(京都大学東南アジア研究センター助教授)